

# 基礎ピアノについての一考察

川 口 恒 子

## I 序

小学校課程における一般学生のピアノの単位は、本学の時間割が小学校課程・中学校課程が一本化されてから「基礎ピアノ」とよばれている。私が昭和25年金沢大学に奉職以来、担当している授業の一つである。

この授業は、どの大学でも問題の多い課目であり、二部会その他研究会の都度、とりあげ討論されてきたがいまだに良い結論が得られないままである。近年我が国においてはピアノが一般家庭に普及し、子供たちの音楽能力も著しく向上した。一方小学校教員採用試験において、ピアノまたはオルガンで教材の弾き歌いなどをさせる府県も多くなってきた。「教育学部小学校課程を受験する高校生は、少なくともバイエルを勉強しておくことが必要である。」とは県下の高校音楽担当教諭の意見であった。そのような情勢の中で昭和54年から当学では小学校教員養成課程、聾学校教員養成課程、養護学校教員養成課程（小学部）及び言語障害児教員養成課程の入試に実技、音楽・美術・体育の中から一教科選択の制度がとられることとなった。この結果については全国の関係者が興味深く期待している。この学生たちが一般教養課程を終え、昨年10月から専門課程の基礎ピアノ教科を受講することとなった。さて、約30年余りたどってきたこの授業をふりかえりながら、また外国のシステムなども参考にして今後の望ましい指導方法を見出したいと思う。

## II a 木造校舎時代

始め教育学部は旧制石川師範学校男子部の校

舎を使用していた。四年制に二年制が併設されており、授業は音楽教室または合同の教官室のピアノを使用した。当時は50分授業でカリキュラムも現在とは違ったものだが、バイエルの指導は息つく間もない忙しさであった。現在のようない音楽的な環境に恵まれていなかったため学生たちの苦労もそれなりに大きかった。

やがて昭和28年ごろ金沢旧城内の現在地に移る。中二階のあるかなりの人数を収容できるホールも旧火薬庫東に建設され、楽屋つきのステージもオーケストラの演奏が可能なだけの広さがあった。そこにはヤマハのフルコンサート・グランドピアノが置かれた。

個人指導も限度にきて、ごく初歩のものは集団一せいで指導にきりかえた。ホールに10台程のオルガンを並べ、私はピアノで指導した。ホールが広いので大声をはりあげねば徹底しないので苦労した。何とか便利な楽器が出来ないものかと頭をひねったものだ。オルガンの発する音に耳のたえがたい時は机の上に紙鍵盤をおいて練習させた。これは師範時代からの備品である。2年制は昭和35年の卒業を最後に廃止された。昭和38年の豪雪には練習室の一部がこわれたりした。

## b 鉄筋校舎時代

昭和41年、鉄筋の新校舎に移転する。新校舎建設にあたって音楽ホールは取りこわされたが第2期工事に建設が予定されていた。諸設備は良くなったがホールを失ったことは何かにつけ不便であった。

教室もふえ非常勤講師にも授業を依頼出来るようになり、専任の負担も幾分軽減された。時

間割は今程しめられていなかったもので、非常勤講師も時間を延長して熱心に指導に当った。時折小学校長の文句を耳にする。「近頃の者は自分たちの時よりピアノがひけない……。」と。無論特に音楽が好きで学生時代懸命に勉強した特殊な校長の言葉である。師範時代は在校期間中はずっとピアノにかかわりがあつたはずである。しかし大学のカリキュラムのピアノは一期(半年)1単位のみである。二年の後期または3年の前期にこの単位をとれば、大部分の学生はピアノとは無縁となり卒業・就職して再び授業でピアノを弾こうとしても思うように手が動かないのは当然である。

バイエルを修得するのに早いものは3ヶ月、普通は半年～1年といわれている。当時受講学生のうち初めてピアノを勉強するもの女子は20%程、男子は約95%であった。初等科のカリキュラムは多く、8限目を終了して練習に来るか、朝早くにするかのいずれかであった。そのため1単位をとるためには、最低80番までにきめたが初心者にとっては他の勉強もあり相当きついで期間内にとれないものは、やむをえず後から補講の形をとらざるを得ない。男子学生にとっては苦手な単位のようなのである。音楽の授業は女性教員にやらしてもらえばよいというような考えもあるようだが、教育委員会は、低学年ではすべての授業を担当教師が行うのを原則とした意向である。男子学生がピアノに適した手を持っている。努力さえすれば女子学生以上の効果をあげることも可能である。この授業に関しては最低レベルをひき上げること、なるべく全員が単位をとれるように最大の関心がはらわれる。単位数や期間をふやせばよりよいことはわかっていても教官数、練習楽器数からも不可能である。一般教養へおろしたらとの意見もあったがこれはいっそう難問である。

ホールはないがピアノ教室は広く設計し、4台のピアノ・コンチェルトが可能ないようにしてあったので、それぞれのピアノに数名づつ配した。まず一せいに練習をさせしばらくしてからAは右手Bは左手というように一曲を二人で演

奏。また一曲に数人を割当てバトン・タッチ式に演奏させるなどして各自の注意力・リズム感を養った。小学校教員養成課程の増員、従来の聾学校教員養成課程・養護学校教員養成課程、さらに言語障害児教育教員養成課程もふえ、この授業を受ける学生はますます多数となった。これと前後して、MUSIC LABORATORY が設置された。教師用の電子オルガンとこれに附属する15台の小電子オルガンにより、15人の一せい指導が出来るようになった。これにより簡単な鍵盤和声も授業に導入した。指はあまり動かないが、コードネームによる簡単な伴奏づけに興味を示す男子学生も若干いた。

県外でバイエルの90番～100番の間の曲を就職試験の課題とするところも出て来たので最低線を100番にひき上げた。一般家庭にピアノが普及し、音楽的な環境がよくなったので男子学生でもピアノの勉強にすごく苦労した昔のような状態は減ってきた。

バイエルを終了した学生には各自適当な教材を与え、小学校教材のひき歌いなども課している。

#### c 小学校教員養成課程・聾学校教員養成課程・養護学校教員養成課程(小)・言語障害児教育教員養成課程の入試に実技が行われるようになってから

従来は殆ど準備しなかった男子学生もそれぞれの方法で基礎ピアノをうけるための勉強をするようになった。予備調査で全く初めてと書いた学生でも本当は何らかの準備をし、昔のように全くピアノにさわったこともないというものはほとんどなくなった。

県下の高校においては、音楽が以前より重要視され担当教諭はそれだけしっかり指導している。直接入試とは関係ないが姉か妹がピアノを習っているので自然と耳から入っており進みの早い学生もいる。子供のころから習っていてベートーヴェンの月光の曲などをひく男子学生も出て来た。細かいデーターはまだでそろったわけでないので次の機会に報告したいと思う。

### Ⅲ 具体的な指導例

実際の指導にあたって最初から正しい姿勢で弾くものは進みが早い。一番苦心するのは比較的に リズム 感覚のよくない学生である。天気の良い日、屋上に出てリトミックダンスをさせる。4分音符・2分音符・全音符・8分音符・16分音符・附真2分音符を歩かせる。手は上下・左右開き、腕組みなどの組み合わせにより、2拍子・3拍子・4拍子を表現する。例えば「手で4拍子を取りながら足は1小節目は4分音符で2小節目は2分音符で歩きなさい。」というように始め簡単なものからいろいろな組合せを練習させる。左手2拍子、右手3拍子を同時にやらせるのも面白い。出来たらその反対もやらせる。複雑なリズムの演奏に役立つ。大分出来るようになったら人数を等分し一方はバイエル44番のメロディーを唱わせ、他方はリズムを踊らせる。

〔44番〕手は4拍子

足は 全音符（1小節～8小節）  
（27～34）（38）

2分音符（9小節～12小節）  
（23～26）（35）

4分音符（13小節～16小節）  
（21～22）（37）

8分音符（17小節～20小節）

附点2分音符（36小節）

最後の4小節以外はドレミファソファミレドで出来ている。

音符の長さを感覚として体で感じる事が出来るようになり、ピアノで弾くのが容易になる。

注：天野蝶女史のリトミックダンスの応用である。28、29頁を参照のこと。

#### 〔三拍子〕

〔18番〕1小節をひいてから次の音を探すのでちょうど4拍子となる。初めて出て来た左手の重音がひきにくいのである。左手の子備練習をさせ三拍目で次の小節の準備をさせればすぐ理解する。

〔62番〕これは右手がとぶため探すのに1拍を必要とし4拍子にひく場合が多い。

左手3小節目三拍DをCとひくものが相当いる。分散和音は和音として予備練習させる。右手は小節の最初の音1の指のみ、オクターブ飛ぶ練習をさせる。最初の8小節を先ずひけるようにし、次の8小節を比較させる。書き方は違うが2小節目と10小節目、4小節目と12小節目が同じであること、8 ----- の記号を覚えさせる。8小節目と16小節目のわずかの違いをわからせるのである。次の4小節左手へ音記号とト音記号の読譜、小節最初の5の指のオクターブ跳躍の練習、次の4小節も殆ど同じ、25小節から終りまで目を通せば最後の2小節左手の練習さえすればこの曲は出来るわけである。あらかじめ説明し準備練習をさせれば手間がかからない。

#### 〔附点音符〕

〔48番〕すぐにひけるものも多いが、なかに少数苦心するものもあるのでそれらを対象に考える。予備練習として声に出して「①ト2①③ト」といわせる。次に○をつけたところを声と一緒に手をたたかせる。出来たら左手で左ひざを①ト②ト③トでたたき、同時に右手はさきのリズムで右ひざをたたき、そして左右の交叉を感覚的に覚えてから一小節だけひかせる。4小節だけ、よく譜を見て、3小節目左手の和音が違っていることを右手のメロディーは上行になることをよく認識してひかせる。これだけ出来ればあとは問題なくひけるであろう。

〔61番〕4拍子であるが、48番が出来れば簡単である。ただし1小節に2度附点が出る箇所であらう。

#### 〔休符で始まる曲〕

[53番] 右手8分休符で始まる

[54番] 左手8分休符で始まる。何となくいやがりあとまわしにするものがある。

1 ①②① 1で左手をあげるようにすればよい。

[76番] 左各小節1拍は4分休符

### 三拍子の伴奏型

[80番] 1拍と2拍は軽くひくが3拍をおさえるものが時々ある。3拍子目が重くなり曲のイメージが変ってしまう。

2拍3拍は同じように軽くスタッカートぎみにひけばよい。

2行目2小節2拍目スタッカッチシモを忘れ、2拍目をおさえたまま休符を無視するものもある。

[72番] 左手の伴奏はまず和音で練習させ、次に楽譜通り、重音がきちんとひけるように手の形をよく注意させる、2行目右手の練習同様に、更に*f*、*p* どちらでもひけるようにさせる。

### 音階

ショパンのいうようにホ長調から始めた方が手の形は自然でひきやすいと思う。しかし初心者は黒鍵に対するコンプレックスがあるので、ハ長調から練習させる。

[65番] 中央のハに両手の1の指をおき先ず反進行で練習させる。こうすると拇指の位置が一緒になり、わかりやすい。拇指の移動の要領をのみこんでから、上段の練習を充分させ65番を弾かせるのがよい。

[73番] 7小節目に出る半音階をよく練習させ臨時記号のあつかいを納得させてから全体の練習に入るとよい。

### 指使い

[51番] 指と指の間を広げる(2小節目)或は狭くする(5小節目)など指使いに特に注意させる。

[57番] 同じ指使いでも和音が違うことに注意させる。

### 対位法的な曲

[60番] この教則本では対位法的な曲が少い。

1小節目右手の動機は2小節目左手が追う。5小節目左6小節目右というように自覚させる。

イ短調の曲の中間部は並行長調のハ長調であること。手の位置の移動、この三点に気をつけさせる。

注: 25頁[18番]より26頁[60番]まで、30頁の楽譜参照のこと。

80番以後はむづかしくなるが、ひいていて楽しい曲がふえている。

## IV 教材について

教材はかならずしもバイエルにかぎったことはない。

ずっと以前芸大のM教授より、ドイツではそれぞれのピアノ教師が自分のメソッドで教本を編集し指導しているときいた。その頃、私もばくぜんと小学校の音楽指導をめざす一般学生のために適切な教材を編集したいと考えていた。当時はメソッド・ローズ、ハワードキャショーピアノコースなどが出版されていた。

バイエルをもう一度、編集者の立場で見なおすと、なかなかよく出来ていると思わざるをえない。しかし近年の入門書は大かた始めから大譜表を用いているがそれは取り入れた方がよいと思う。対位法的な曲が少いことは一番気になるところ。いろいろな曲を使うには著作権がからみかなり高価なものになるに違いない。出来るだけ廉価で手に入れやすいことも重要な条件である。また私の時間も多消費することも出来ないままに自分で編纂することは実現していない。

その後「トンプソン現代ピアノ教本、ツィーグラ 耳から学ぶピアノ教本、コダーイ・システム ピアノ学校、シュンゲラー ピアノ教室などそれぞれに特色のある教本が刊行されており、それらで学ぶところが多い。

カバレフスキーの「子供のための24の小曲集」を初歩も進んだ学生も一緒に使用している

大学もある。例えばモーツアルトの「トルコ行進曲」は子供も大ピアニストも弾く。こういう意味では、同一教材を使うのも一つの方法であろう。

最近試みにシュンゲラーの教則本を或る学生に使用させて見た。まじめな学生であったが耳なれない教本の使用はかなりの負担であったらしい。新しい教材を用いる時は、教師の側で周知な準備期間が必要なことを痛感した。

種田直之・カールスルーエ音楽大教授(西ドイツ)の解説から引用すれば、バイエル(1803~1863)はマインツに住み、一流音楽出版社であるシュット社より無数のピアノ曲を出版して大成功を収めた。当時流行のオペラのメロディーとか流行歌風のものをピアノ独奏や四手連弾に編曲、作曲した。大衆の好みを敏感にうけとりそれに応じる能力に長けていたものと思われる。当時ピアノ入門書というものが殆どなく、特に楽しみながらピアノにはいって行ける教則本を書いた。まずシュット社で出版、仏・英・スペイン語にも訳され全世界に広まった。ソ連でも根強く愛され、オーストリアでは今でも用いられているという。ただ本国のドイツでは今日全然知られていない。ドイツではバイエルはピアノ教師としては正統派でなく従ってまったく認められなかった。バイエルの長所は非常に組織的系統的に組立てられ、がっちりと基礎から勉強したいという日本人の性格と合っているようである。

## V グレードについて

さて、今までは初歩から始める学生をのみ対象にしてきたが、今日この授業のもう一つの問題点は進んだ学生をどうあつかい、どう評価したらよいかという点である。たまたま通った芸大の廊下で、47年度別科ピアノ試験課題曲の掲示を読んだことがある。グレードⅠからⅥまでそれぞれの楽科によりグレードの指定がある。前年度より上のグレードの課題で受けることが望ましいなどの注意書きもあった。小学校課程のピアノとは全く性質の違うものであるが、その評価から何らかの手がかりが得られたらよい

と思った。当時はじめてのグレード制の試みであったようで、その評価にはグレードは書き込まれなかった模様である。

英国では毎年 The ASSOCIATED BOARD of the ROYAL SCHOOLS OF MUSIC から PIANOFORTE EXAMINATIONS GRADE I~VIIが出版される。各自の能力に応じたグレードで受験する。Ⅳ、Ⅴあたりでの受験が多いそうである。1973年ロンドンで買って持ち帰ったものと1979年とりよせた本と一部分比較してみよう。

'73

- I. BACH Minuet in G BWV Anh. 115  
BARTÓK Folk Song  
etc.
- V. BACH Invention No. 11 BWV 782  
SCHUMANN Contented Op. 15 No. 5  
etc.

'79

- I. JONES Minuet in C  
BARTÓK Wedding Song  
etc.
- V. BACH Gavotte BWV 815  
MENDELSSOHN  
Kinderstück op. 72 No. 1  
etc.

程度は同じでも曲目は全部変わっていることに注意したい。

## VI まとめ

昨年ワルシャワでショパン・コンクールをきくかたわら、ワルシャワ市内の音楽小学校、音楽高校などの見学をした。ソビエトでもそうであるが、先づソルフェージュをしっかりと教え、その後各自にむいた楽器を初めて練習させている。手の形をきおつけることと音をよくきく習慣は初歩から大切で、基礎ピアノにおいても、この点もう少し時間をかけなければならないと反省させられた。演奏は自然にひけることが望ましいが、論理的に物を考えるのが大学生の特色であるから、おそく始めたものはその利点を

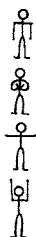
応用することが上達の早道であろう。時とすると当然中学校で習ったはずの音程とか音階についてもわからないという学生もいるので改めて説明することもある。音楽通論をもう少しわかっていた方が望ましい、フレージング・アーテ

イキュレーションなどについても、今少し指導出来る時間のゆとりがほしいと思う。教材については、日本人作曲家による日本人の特質を生かすような良い教則本が出来ても良い頃と思うのである。

〔備考〕 25頁 Ⅲ 具体的指導例

バイエル44番〔29頁〕を手と足とでリトミックスダンスによって表現する場合

手は四拍子



1. 体側につけて力を入れる
2. 胸の高さで腕を組む
3. 両手をま横に広げる
4. 両手を上にあげる

足は音符を歩く

○ 全音符

1. 右足1歩前進
  2. 左足爪先で右足前をちょん
  3. 左足爪先で左横をちょん
  4. 左足爪先で右足うしろをちょん
- 次は左足前進、右足で左足前ちょん、右横ちょん、後ちょん……。



(注) ○ 右足 ● 左足 ▲ 爪先  
ちょんは爪先でかく床にふれる

♪ 附点2分音符

1. 右足1歩前進
2. 左足爪先で左横ちょん
3. 左足爪先で右足後ちょん

♪ 2分音符

1. 1歩前進
2. 体重を前足にかけて両ひざをまげ腰をおとす

♪ 4分音符

普通に歩く

♪ 8分音符

かけあし

♪ 16分音符

こきざみに床をするようにかけあし

**Moderato**

44.

8 1 2  
1234 *sempre legato*  
5 4

全音符から8分音符までの音の長さを、正確に区別する練習です。全音符の部分が速くならぬように。

8

1 2 3 4

1 2 3 4

[illegible]

8

23 1 2 3 4

12 3 4

27

8

35

1 2 3 4 1 2 3 4 1 2 3 4

**Allegretto**

18.

**Allegro moderato**

62.

**Allegretto**

48.

61.

**Moderato**

53.

**Comodo**

54.

**Allegro moderato**

76.

**Allegretto**

80.

**Comodo**

72.

**Moderato**

65.

73.

**Moderato**

51.

57.

**Comodo**

60.

59.